

日本人の「待ち心」今昔 (10)

武井 勇 四 郎

序

- 第一章 「垣間見」の日本的風土 …… (以上, 第 33 卷第 2 号)
- 第二章 日本人の「待ち心」の原風景 …… (以上, 第 33 卷第 3 号)
- 第三章 『枕草子』の待つものの品々と
斎藤徳元の『尤之双紙』 …… (以上, 第 33 卷第 4 号)
- 第四章 「待つ間」の美意識——兼好法師 …… (以上, 第 34 卷第 1 号)
- 第五章 今も昔も変わらぬ「来迎待ち」 …… (以上, 第 34 卷第 2 号)
- 第六章 出逢い待ちと垣間見の展観美 …… (以上, 第 34 卷第 3 号)
- 第七章 閑話——「待つ間」さまざま——休題 …… (以上, 第 34 卷第 4 号)
- 第八章 情念の「待ち心」と夢幻能 …… (以上, 第 35 卷第 1 号)
- 第九章 一人当千の「待ち伏せ」と敵討ち
- 一節 「女時」の待ち伏せ——ヤマトタケルの女装
- 二節 十七年待って親の敵討ち——『曾我物語』
…… (以上, 前号)
- 三節 「夫婦時」の待ち伏せ——『あきみち』
- 四節 「男時」の待ち伏せ——忠臣蔵事件と「仮名手本忠臣蔵」
…… (以上, 本号)
- 第十章 「暫し待て」の諸相
- 一節 「暫し待て」——謡曲「俊寛」
- 二節 歌舞伎「暫」——言霊の声
- 三節 待たせの美的演出——二条城謁見の間
- 四節 待たせの戦法——吉川英治『宮本武蔵』
- 五節 利休の茶室「待庵」

第九章 ^{いちにんとうぜん}一人当千の「待ち伏せ」と敵討ち

[承前]

三節 「夫婦時」の待ち伏せ——『あきみち』

全文を掲載したいほどの名作であるが、長いので要約する。

〈鎌倉に山口あきひろという金持ちがいた。子のあきみちは親の代理訴訟で若者を沢山連れて京にのぼった。その留守中に悪名高い盗賊、金山の八郎左衛門が山口の館を夜討ちして宝を奪い、あまつさえあきみちの父親を殺害した。

左衛門は堀を巡らした館に住み、郎党五十人を抱える日本一の夜盗団の首領で、敵するものはいなかった。源頼朝も三度討つことを命じたが捕まらず狼藉の限りを尽くしていた。左衛門は、海の底、山の中に十日も姿をくらす不思議な強力者だった。

あきみちの母は夫を失い、家は廃れ、尼になった。京から帰ってきたあきみちは母から狼藉の有様を聞かされ、なにがなんでも敵を取ると誓った。しかし、相手は夜盗の強力者で打つ手がない。

学問を究め、武芸を嗜み、美男子の二十五歳のあきみちには五年も連れ添った美貌の北の方(妻)がいた。あきみちは帳台に閉じこもり七日七夜、敵を討つべくいろいろと思案をめぐらせた。

思案のあげく、あきみちは北の方に金山の八郎左衛門の一夜妻になってくれないかと頼む。聞いた妻は「二人の肌に触れれば来世では丈三尺の鉄釘を打たれます」と驚き入るが、あきみちは親の敵を討たずしては無念が晴れないと説得する。北の方は夫の言い分を聞き入れ力添えするしかなかった。なすべきことを夫に尋ねるので、「遊女として左衛門に近寄れば、お前は美人だから彼は次の夜も呼ぶであろうから、そのとき飛脚に知らせ

てくれれば夜半に紛れ込んで待ち伏せして夜討ちする」と秘策を授ける。

北の方は金山の館へ付き添いの女と駕籠に乗って出かける。美貌の遊女がいると聞いた左衛門は館に呼び込み遊興する。しかし、打ち解けず未明にはどこへともなく帰ってしまう。翌日も武装した郎党二十人ほどが護衛し、一分の隙も与えず夜の内にどこかへ帰り、北の方はあきみちに寝所を通報するよしもなかった。

かれこれしているうちに満一年にもなり左衛門との間に若君すらできた。遊女は左衛門の北の方におさまった。それでも左衛門は打ち解けず寝所を明かさなかった。

あきみちの誤算であった。彼は父の敵どころか、愛妻の敵までも討つ羽目になった。北の方はあきみちが恨んでいないかと思う日々が続いた。前夫のあきみちに本懐を遂げさせるために、北の方は仮病を装って十日ほど断食した。左衛門はやつれていく北の方を見て、「葉ならいくらでもある。命が危ない。故郷の父母のことを思うのか」といたわるが、北の方は、「もう一年以上にもなるのにあなたは一夜中打ち解けたことはありません。すぐとどこかへ帰ってしまいます。きっと外にすばらしいお方がおいでで寝所を教えてくれないのでしょうか。この心配で病気になったのです」と悲しむ素振りをする。

左衛門は、「そんなことはない、敵が多くて寝所を教えられないのだ、いまや若君もできたことだから、そこを教えるから機嫌を取り直して欲しい」と慰め、左衛門は館の中の寝殿の奥座敷を見せる。ここで左衛門が寝ているのかと思えばさにあらず、帳台の後ろの戸口は山手に続き、谷川があり小舟が浮かんでいる。

左衛門が舟に乗せて一町ばかり漕いで行くと、山道があり岩穴に通じている。そこに高麗畳を敷いた寝所がある。紛れもない隠れ家で、かつて左衛門が鎌倉殿に攻め込まれたときに身を隠した所である。

左衛門は北の方に言い聞かせる、「決して口外するな、この岩穴は三百

人余りの人夫に造らせ、あとで一人残らず皆殺しにした、今では誰一人知る人はいないのだ」と。舟は一艘しかない。北の方は、こんな嚴重な岩穴にあきみちを忍び込ませることは至難の業だと思った。

ところが、夜盜の左衛門は信濃の国に四、五日出かけるチャンスが到来した。早速、北の方は付き添いの女に手紙を持たせた。「明日、女装して輿(こし)に乗って来て下さい。こんなに遅くなってしまったのが悔しいのですが、あなたにお目にかかれます。すぐにお出で下さい。」あきみちはこれを読んで、すでに左衛門との間に子もいることだし、今さら行くこともあるまいとも思ったが、自分が死んでも親の敵を討つのが男の意気地だと気を取り直した。

あきみちは人を連れずに女のなりで輿に乗って金山の館に出かけた。北の方はあきみちを帳台の陰に隠し、一年ぶりのこととしてその夜の話は尽きなかった。翌日舟で渡って岩穴を見せた。「ここに潜んでお待ち下さい、明日、左衛門が信濃から帰って来ます。」あきみちは言われた通りそこで待ち伏せした。

左衛門が夜に信濃から帰って来た。盗品の財宝を北の方に見せ家来にも酒を振る舞った。北の方を帳台に連れては行つたが、岩穴に入る様子がないので、北の方は「酔っぱらっていらっしゃるので、例の所で旅の疲れをとったらいかがですか」と誘う。

左衛門はそう思い、舟に乗ろうとしたが、「これは変だ、綱の結び目が違う。その上数人が乗つたのか、舟が水ざわ深く濡れている」と不審を抱いた。「留守中あまりに退屈したので昼ごろ若君と一緒に舟に乗って遊んだのです」ととぼけ、その場をやり過ごす。

左衛門は船を降り、山に登るとき、北の方に「この蠟燭を持って先に行きなさい」という。北の方は潜伏しているあきみちが危ういと思い、わざとしくじった振りをして蠟燭を消すが、左衛門はつけなおす。また北の方はわざと転んでまた火を消す。しかたなく左衛門が火をつけ先頭になって

入っていく。

岩穴の中に入ろうとするとき、左衛門は人のいる気配で入り渋る。北の方は「なにかご不審があるのですか」と少し怒りっぽく言う。「入口のところが湿っている、おかしい、内に人がいて長息をしたのだ」との不審に対して、北の方は「普段は一人で入るので汗もかかないでしょうが、今日は二人で入ったからそうなったのでしょうか」ととりつくろう。

左衛門は岩の戸を開けて入ろうとするが、脇の間で人形をつくり、鎧を着せ長刀を持たせて左衛門そっくりにして中へ差し入れる。内に待ち伏せしていたあきみちは、刀をさっと抜いて斬りかかろうとするが、不思議なことに虚空（こくう）に三百余人の天道の叫び声がした。「あきみち待て、討つな!」あきみちは刀を押さえて待った。

左衛門は内に誰もいないと油断して入ったとき、これをのがさずあきみちは刀で左衛門の細首を打ち落とした。「あきみち待て」の声は岩穴を造った三百余人の魂の無念が告げる声であった。

さて二人はそこを忍び出た。敵を討ったので二人ともに仲良く暮らせると思われるのに、妻は言う、「私は出家して後世を願います。」あきみちは「これはまたどうしたことか、なんの怨みがあつてか」と聞くと、妻が言うには、「左衛門のことを想っているではありません。あなたは本懐を遂げました。私はそのための手引きを尽きました。女の身として恐ろしいことを企みました。また若君までいます。これよりあなたに馴れ親しんだとて恥ずかしくて、末恐ろしいことです。でも捨てるのは命で、死ぬことはできません。これほどあさましい身はありません、若君の親を殺すべく手引きしたのですから。これを菩提の種として後世は安楽の身になりたいのです。」

北の方は二十二歳で尼となって山に籠もり、若君は山口次郎左衛門を名のって分限（＝金持ち）の身となり、継父あきみちも高野山にのぼり修行を積んだ。（岩波旧版『御伽草子』pp. 394-410）

御伽草子は室町から江戸初期にかけての説話である。その一話『あきみち』は親の敵討ちをテーマにした短編の傑作である。二点注意を促したい。

1) この敵討ちは、妻の不倫を承知の上での夫婦協力による点で、敵討ちの大義観の方が、夫婦の貞操観を上回る。この意味で親の敵討ちの大義の美化の始まりで、後になる西鶴『武道伝来記』の武士道の美化傾向を先取りしている。他方、女装とか、死霊の助力とか、出家とかは、『曾我物語』と同趣であり、旧来の「女時」の敵討ちの影を引く。妻が敵に身を売り、討つべき敵と子をなしてまで敵討ちのチャンスを気長に待ち、前夫に加勢して本懐を遂げさせる点で、まさしく「夫婦時」のスタイルをとる。

2) 見られるように、文字通り暗い坑道に身を隠し潜伏する点で、本来の「待ち伏せ」の性格が色濃い。この「あきみち」のストーリーの構成に、「待ち伏せ」の持つ偽装性、潜伏性の構造そのものが見事に組み込まれていることに注目しよう。つまり、読者には話の結末を最後の最後まで明かさない。「待ち伏せ」とは人目に立たぬように身を隠し、偽装を凝らし、本体をさらけ出さずに、好機に敵の目前に躍り出て意表を衝く戦法であり、いわば隠密や偽装を事とする。これはいわば「隠しの美学」である。初回の読書では、読者の意表を衝くいくつかの構成上の仕掛けがあり、結末を予想できない。プロセスの結末を最後の最後まで明かさずに読書のサスペンス感を高める仕組み、それが「隠しの美学」である。この点で『あきみち』は数ある敵討ち物の中で、読者の〈トキ〉の美意識の高揚を配慮した逸品である。こうした「隠しの美学」は浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」にも採用されているので後述する。

幼子による親の敵討ちの主題は『曾我物語』をはじめ、古浄瑠璃「ほり江巻双紙」(1613年)、西鶴の大作『武道伝来記』(1687年)を経て、並木正三「幼稚子(おさなごの)敵討」(1753年)、楚満人「敵討義女英(ぎじよのはなぶさ)」(1795年)、小枝繁の読本「催馬楽(さいばら)奇談」(1811年)まで綿々と続くが、その中であって江島其磧の「けいせい伝受紙子」(1710年)は、先の「夫婦時」

の系統を引きながらも、浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の先鞭をつける。

「けいせい伝受紙子」の内容に入る前に、まず、事柄を分かりやすくするために忠臣蔵事件（別称「赤穂事件」）について触れておこう。

四節 「男時」の待ち伏せ

— 忠臣蔵事件と「仮名手本忠臣蔵」

武士道の懐旧的美化である西鶴の『武道伝来記』と『武家義理物語』（1688年）が発表されて十五年も経過しない1702年に仮構的な語りならぬ、地でいく歴史的事件が起こる。

時は関ヶ原の合戦よりちょうど一世紀経過していた第五代將軍綱吉の、世は泰平の時代、江戸の文化の最盛期、元禄十四年（1701）三月十四日、午前中、所もあろうに江戸城中、播磨国赤穂（五万三千石）城主の浅野内匠頭長矩（あさのたくみのかみながのり）三十五歳が高家筆頭の六十一歳の吉良上野介義央（きらこうずけのすけよしなか）に白書院に通ずる松の廊下で斬りかかる。この日は毎年恒例の年頭勅使接待、つまり、朝廷からの年賀の礼に対する幕府の答礼が、白書院でとり行われる四日間の最後の日に当たっていた。吉良家は幕府の高家衆で浅野内匠頭はその勅使接待の御馳走役に当たっていて、その指南役を吉良家が勤めることになっていた。すでに勅使が登城して秋の間で休息し、將軍の出を待つ間だった。時も時、所も所、そうした事情の中で浅野内匠頭が殿中の松の廊下にて吉良上野介に斬りかかったのである。

しかし、浅野は留守番役の梶川与三兵衛に抱きすくめられ吉良上野介の額、肩の浅傷で仕損じた。吉良が並みいる人の中で浅野に「御作法の一つも心得ぬ内匠頭殿に、何事のお分かりがおわそうぞ。あれにてどうしてこの大切な御役儀が勤まり申そうや」（福本日南著『元禄快拳録』岩波文庫（上）pp.55）と悪口を浴びせたとき、浅野の忍耐の緒が切れて斬りかかったとされる。それは御馳走役になった浅野が、儀式の有職故実に通じている吉良に

賄賂を贈らなかつたために、儀式の手ほどきを受けられずいじめられたことへの遺恨ともされる。これが事件の発端である。即日、浅野は切腹、御家断絶、所領取り上げとなる。

一年十カ月後、元禄十五年十二月十五日未明、四十六士の復讐の討ち入りがあり、吉良の首級が挙げられ、泉岳寺の浅野内匠頭の墓前に手向けられて、主君の敵討ちに成功した。世間は驚愕した。『曾我物語』の再来と映った。

即刻籠城して一家郎党自刃か。望みを託して弟の浅野大学の閉門解除による赤穂の復興か、それとも直ちに吉良上野介への復讐か。こうした選択肢の中で、赤穂浪士大石内蔵助がとった方策は、そのいずれでもなく、長い期間の潜伏と偽装、極秘裏の準備と集団の結束による吉良邸への討ち入りであった。

ここでまず、旧赤穂藩の家老大石内蔵助四十三歳の一年十カ月間（八月には閏月がある）にのぼる潜伏期間の実録のあらましを辿る必要があろう。以下は諸家の研究を参考にまとめたものである。（松島栄一著『忠臣蔵』岩波新書、丸谷才一著『忠臣蔵とは何か』講談社、田原嗣郎著『赤穂四十六士論』吉川弘文館、野口武彦著『忠臣蔵』講談社、福本日南著『元禄快挙録』岩波文庫（上）（中）（下））

1701年（元禄十四年）

- 3月14日 浅野内匠頭の刃傷事件、浅野即刻切腹の刑罰、御家断絶、領地没収の裁決
- 3月29日 浅野大学再興の嘆願書を出す。この頃神文誓約者六十人前後
- 4月中頃 大石は浅野大学の再興なきときは浅野一周忌を待って、吉良復讐を計画。即刻討ち入りの急進派（堀部安兵衛、高田軍兵衛、奥田兵左衛門）は籠城による開城抵抗の意見提出
- 4月19日 脇坂淡路守赤穂城に入城、赤穂藩とり潰し、赤穂城開城、多数の浪人
- 5月21日 大石、赤穂を離れる
- 6月中旬 大石、京都近郊の山科に仮住い、同心者六十名は赤穂の近在、京都、大坂、奈良、江戸の各地に散在

- 6月下旬 江戸の堀部、高田、奥田が大石に江戸に来るよう催促、大石は家再興を第一とし、急進派に距離を置く
- 7月から8月 江戸にくだった浪人は急進派堀部の見解になびく。吉良の屋敷替えの噂流れる
- 11月3日 大石は部下を連れて江戸到着後、江戸の同志と密談、江戸の急進派一周忌をめどに討ち入りを提案。大石は浅野家再興の可否を見極めた上で提案すると先延ばし
- 11月10日 大石は原惣右衛門と大高源五を江戸にとどめ、江戸の活動の拠点探しの会議、同心者の意志の統一と結束固めの多数派工作に成功
- 1702年(元禄十五年)
- 1月 急進派の高田脱落、日和見の同志も出る
- 2月15日 山科にて大石の隠れ家で会合、吉良の周辺の変化で討ち入りを急ぐ急進派との議論。浅野大学の再興に望みをかけていた大石の慎重派も、主君の恨みを晴らすことに傾く
- その頃大石は撞木町や島原で遊廓遊び、この遊蕩は用心深い吉良側に対するカムフラージュである。大石の「昼行灯」と言われる偽装行動である
- 3月5日 大石派の浪人吉田忠左衛門と近松勘六が変名して江戸に着く
- 3月15日 浅野の一周忌法会
- 6月 堀部がたとえ十人でも決行できるとの考えで大石に江戸下向を促す、堀部は上京して原と相談、大石と別行動を取ることを得策としたが、ちょうどその時浅野大学は閉門を解かれたものの、知行は召し上げられ、大石の浅野再興の期待はあえなく潰える
- 7月28日 円山会議で決行が誓われる、十九人の出席者、この会議が討ち入りへの大きな転機となる。しかし、一味同心者は五十名前後に減る
- 8月10日 堀部は江戸に戻って舟遊びにことよせて円山会議の結論を仲間に伝え、吉良邸の偵察を始める。大石は山科から京都に住まいを変える
- 8月下旬 赤穂城に永井伊賀守が入城、浅野大学は広島浅野本家に御預けとなり、赤穂再興の希望は皆無となる
- 9月中 同志は四、五名ずつ目立たぬように京都から江戸へ移動開始
- 10月7日 大石は近松、早水、菅谷、三村とともに京都を出発、その他の同

志も続々江戸に集まる

- 10月26日 大石は十カ条の訓令を出し、討ち入りの服装、武器、道具の準備、脱落者の予防を説く、各グループそれぞれのアジトに名を変えて潜伏、それぞれ米屋、小間物屋に化け、変装して吉良邸を内偵・探索
- 11月 大石が日本橋石町の小山屋に住みつくと頃、五十数人が日本橋、麴町、芝、両国、深川、本所などの十四カ所にべつべつに住む、米沢町の堀部、麴町の吉田、小山屋の大石の宿がアジトの連絡場所となる、若手は吉良邸の動静、上杉家の吉良支援の様子を、変装して偵察、吉良邸の地図も作成される
- 会議で討ち入りの趣意書、同志の神文誓約書、すでにかんりの変心者、脱盟者が出ていて、同心者は最初百二十名、江戸に集まったのが六十名前後、決行したときには四十七名、しかし、脱落者が吉良側には走らず密告者なし
- 12月3日 吉良邸で六日に茶会があるとの情報あるも延期、十四日に忘年茶会が吉良邸にあるとの情報で、この日を討ち入りの日に決定
- 12月14日 槍、長刀、弓、竹梯子等の武具、道具類が堀部の家に集められ、予定の三カ所に分散して結集、朝、雪が降る
- 12月15日 未明(午前四時)吉良邸に表門と裏門の二カ所から全て火事装束で、寝込みを急襲、夜討ち、炭部屋に隠れた吉良を探し出し首級を挙げ、本懐を遂げる、二時間で決着、吉良側の死者十六名、負傷者二十名、大石側に死者なし、首級を泉岳寺の浅野内匠頭の墓に手向ける。仙石屋敷に向かい、四十六士は四家に分散して御預けに

1703年(元禄十六年)

- 2月3日 討ち入りから五十日目に切腹を命ぜられ、四家それぞれの所で四十六義士切腹

以上、下線で示したように、大石の行動を見ると、遊廓での偽装、隠れ家の変更、変名、変装、江戸のアジトの設定、一味の分散、一味の同心的結束、夜討ち、といったスタイルを取り、従来の待ち伏せの戦術のいくつかの特徴を備えていることに気づく。しかし、受けの待ち伏せでなく、攻めの集団のそれである。この点で実録の忠臣蔵事件と、脚色、潤色、粉飾を施され

ている浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」とではどう違うのかが後の課題となる。

大石の討ち入り事件の直前に、亀山城内で石井源蔵、半蔵兄弟が父と兄を殺害した赤堀源五右衛門を探しだし、乞食に身をやつして門口で待ち伏せして二十一年目に敵討ちする事件が起こっている(1701)。それを直ちに取材したのが、浮世草子『元禄曾我物語』(都の錦 1702年)であり、翌年に版行されている。江戸元禄時代における『曾我物語』の再来と見る大事件であった。作者(都の錦)が、その事件を『曾我物語』の江戸版と見たことは、その表題からして分かる。

『元禄曾我物語』は、東海道の敵探しの長い旅に出るなどの点で、西鶴の『武道伝来記』の系統を引きずっている。幼子の兄弟が父の敵を二十一年後に討って本懐を遂げる「敵討ちの敵討ち」の場面設定などは『曾我物語』と同趣である。敵討ち物は忠臣蔵事件にとどまらなかった。時代を遡ってすでに葬られてよい事件まで注目されるほどの敵討ちブームとなり、浄瑠璃や歌舞伎に相次いで謡われ演じられた。

「けいせい伝受紙子」(1710年) ——

この浮世草子は忠臣蔵事件の八年後に書かれた。江島其磧は忠臣蔵事件を直接扱うこととはばかって、太平記時代の塩冶判官の刃傷事件に仮託し、焼き直した。しかし、舞台は江戸遊廓である。判官の妻への師直の横恋慕が原因で、判官が師直に公的な場で刃傷に及び、切腹させられる。それを見てとった判官の家来鎌田惣右衛門は殉死しようとするが、判官の「おなじ志ならば生残って、我此無念をはらしてくれ。是何よりの忠節ならん」(岩波新版『けいせい伝受紙子』p.264)の言葉を聞き、また判官の家老職大岸宮内(おおぎしくない、大石内蔵助に擬す)の意見に従い、城の明け渡しに賛成した。惣右衛門の妻はもととはといえば、島原遊廓の太夫職陸奥(みちのく)であったのが、惣右衛門が金三百両を借りて請け出した女房である。その金が返せないのので再び揚げ屋に行ってくれと頼まれると、武士の妻として快諾した。実は金を

作るために島原遊廓に妻を売ったのである。傾城陸奥は揚げ屋の用意するきらびやかな衣装を纏わず、粗末な紙子を着て伊達な花魁道中をする。「けいせい伝受紙子」の外題はここから来る。これが受けて敵の師直が通うところとなり、陸奥は千両にて師直の御伽に身請けされる。しかしこれではつまらぬと、島原の花川屋に陸奥を引き連れ、大座敷二間借りての色事遊びをする。東隣の丸菱屋には判官の家老大岸が通い、陸奥が師直邸の見取り図を大岸にこっそり渡す。その廓に喧嘩騒動が起こったのを幸いに大岸が、遊び惚けている師直を討とうとするが、陸奥は、師直方には七、八十人の武士が揚げ屋に群がっているから、ひとまず裏塀を越えて逃げなさいと大岸に内通する。

物語は遊廓を舞台に敵を討つまでのプロセスを潤色し、かつそのプロセスを引き伸ばし、それを観者に楽しませるべく仕組まれている。その点で、敵討ちの場面の潤色と劇化が早くも目立つ作品である。

この敵討ちは島原遊廓の和事を主とするが、討ち入りの荒事の立ち回りが結末に控えていて、読者の鬱屈した気分をからっと晴らす構成になっている。

「けいせい伝受紙子」は、傾城陸奥の支援なくしては敵討ちが成立しない点で「夫婦時」の性格が色濃い。しかし、集团的結束による「主君」の敵討ちである点で、浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の雛形となる。

対して、同じ頃の作で、同じく忠臣蔵事件を直接話材にすることをほぼかって、師直の太平記時代に仮託した近松の浄瑠璃「碁盤太平記」(1710年)では、忠臣蔵の人物に擬した大星由良之助(=大石蔵之助)とか、その長男力弥(=主税〔ちから])とかの、観客の誰にも容易に連想できる名を用いて、討ち入りの場面がクローズアップされ、微入り細にわたって勇壮な活劇舞台に仕立てられる。

まず敵方の師直に内通した寺岡平右衛門が由良之助の邸にやって来る。力弥はスパイと見て斬りかかり、とどめを刺そうとするが、外から由良之助が

帰って来て止める。瀕死の寺岡は師直の屋敷の凶面を、碁盤を用いて白石で塀を、黒石で邸を示し、敵を討てと最期の息を引き取る。「碁盤太平記」の外題はここから来る。由良之助の母と妻は大星の敵討ちを促すために自刃する。「主君の敵の師直に母の仇妻の仇。三つの恨みを一太刀に晴らさん」の子大星の誓いの言葉を聞いた老母は「アア嬉しや本望や。(中略)詞を待たるぞやいか成知識の勧めより。今の詞を引導にて嫁姑は成仏す。(中略)詳しいことは冥途にて」(岩波新版『近松浄瑠璃集』上 pp.266)と声を振り絞って、息絶える。これが前段の和事で、続く場面が荒事の討ち入りである。

ここには「けいせい伝受紙子」に見られる「女時」の敵討ちの面影は微塵もない。場面は観客への見せ場であり、まさに四十七義士の師直の屋敷侵入から、炭焼き小屋に隠れた師直の首を落とすまでの夜討ちの戦闘場面を縷々と謡い語る(同書 p.267-278)。

この浮世草子「けいせい伝受紙子」と「碁盤太平記」の物語の筋内容は浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の手本になる。前者では、判官の切腹の場面はついたりであるが、後者では見せ場となる。これらの同時代の作品で分かるように、忠臣蔵事件の取り組み方はさまざま、各場面の特化、粉飾、潤色、脚色、劇化が始まっている。

忠臣蔵事件から奇しくも四十七年後に成った浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」(十一段)は、先行作品の動向を受け入れるだけでなく、忠臣蔵事件に同時代の江戸風俗を加味し、名場面をドラマ化したいわば十一個の大小の石を連ねた首飾りの感がある。それぞれの石を美しく磨き装飾を施し、それを連ねる通し糸は細くなりだし、ややもするとその装飾に目が奪われ、物語の筋が見えにくくなる。その後間もなく書かれた通し狂言「仮名手本忠臣蔵」では、二段、八段は上演されず、その傾向はさらに時代とともに進み、ややもすれば物語の展開の筋道の方は疎かにされ名場面のみ上演される傾向が強まる。忠臣蔵事件の実像が失われ、「待ち伏せ」はおろか、場合によっては「敵討ち」すら影を潜める。

こうした傾向はすでに、『曾我物語』では近松の「世継曾我」（1683年）に前例があり、討ち入り後の後日譚が主となり、黄表紙『敵討義女英（ぎじょのはなぶさ）』（1795年）では「敵討ち」の場面すらない。それぞれの玉が糸から外されて、名場面だけの上演となれば、物語の筋が見えにくくなるは、当然である。

こうした傾向はまた、江戸時代末期の落語「仮名手本忠臣蔵」（桂文治作）が示唆的である。

「サア、始まり始まり。忠臣蔵大序のはじまり」□、札を売つているところへ、若い男札を買って芝居へ入りしが、いまだ始まらず。見物もなければ、「あたおもしろもない」と、あくびたらだら。役者も顔を見やわして、「これでは、始まらそうにも、見物もなし。鈍なものじゃ」と思ふうち、「幕開け、幕開け」と、しきりにぼやく。役者のうちより、カノ男を楽屋に呼んで言ふは、「しよせん、おまへ一人で始めることもできぬよつて、まづ芝居の狂言の筋おぼ、とつくりと話して聞かそうほどに、了見していなしやれ」と、発端から幕切りまで、あらまし筋を言ふてかしければ、あほらしながら、それ聞いて戻りがけに、難波村のおぼが方へ行き、「さてさて、今日はいまいましことじやあつた。忠臣蔵の序を見ようと思ふて、芝居へ入つたところが、芝居は始まらず。狂言の訳を話にしてかしよつた」と言へば、おぼ「わしは、ついでアノ大序を知らんが、どふいうものじゃ」と言へば、「まづ、鶴ヶ岡の大仏さんで、かぶとを改めるのじや。景清が引きちぎつたかぶとか、渡辺綱のかぶとか分からんよつて、葵御前といふおなごに目利きさすのじや。それに、斎藤太郎左衛門がほれ寄つて」「これこれ、そのよふな芝居がどこにあるもので」「イヤマア、ちよつと筋ばかり言ふのじや」「イヤイヤ、それでは筋が違ふてある」と言へば、「サア、筋が違ふてあるよつて、難波へ来たのじや」（『原典落語集』p. 106、叢書江戸文庫（45））。

見られるように忠臣蔵の「大序」の観劇に出かけたら、見せ場でないので

客がいないどころか、どうも、当人もおぼも物語全体の筋を知らないのである。通し狂言を全部通観するには早朝から夕方までかかった。すでに断片的な名場面だけが独演されていて物語の筋が把握されていないことが、落語のネタとなるほどまでに進行していた。

それほどにそれぞれの段や場が粉飾され、脚色され、特化され、ドラマ化されて、観客の興をさそうように改変される。逆に言えば、忠臣蔵の物語の筋は万人周知の事実とした上で、さらに当時の名歌舞伎役者、人形使い、義太夫の持ち場に依じてそれぞれの見せ場や聞かせ場が潤色される。そのため、場合によっては演ずる役者の仮構の粉飾が濃くなり、それだけを観劇したのでは物語の全体像が掴めず、一曲の玉を通す本来の糸が見えなくなる。

昭和十六年(1941)、忠臣蔵事件を元禄時代を背景に、実録風の史劇『元禄忠臣蔵』を書き上げたのが真山青果である。彼はこれまでの忠臣蔵事件の歴史研究や浄瑠璃、歌舞伎、文楽を通覧・通観した上で、それを著した。すでに福本日南の歴史研究の大作『元禄快拳録』が明治四十二年(1909)に発表され、これまでの史的ならぬ詩的想像力による粉飾、脚色、伝説の大半はこの書によってほぼ払拭され、事件の実像が浮き彫りにされた。真山の新趣向とは、これまでの膨張した詩的特化や脚色を抑え、史的に復元することにあつた。細る糸を史的に太くした。半面、史的になった分だけ劇的な面が半減した。この史劇は物語の筋が坦々としていて単調で、史実に忠実な歴史書を読む感は免れがたい。また、討ち入り後の「泉岳寺」への首級の手向け、「仙石屋敷」の各義士を尋問しながらの討ち入りの細部描写、「大石の最後の一日」の切腹でもって総仕上げとする。従来描かれなかった細部にかかなりの分量を割いていて、いわば『元禄快拳録』の史劇版とも受け取れる。

史劇『元禄忠臣蔵』と浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」との時代の隔たりが大きいだけに構成も大きく違う。前者は史実に則って大石の切腹の最期の日までを仔細に描き、後者は討ち入りまでをいくつかの山場・見せ場を設けて劇的に構成し、あっさりした討ち入りで終了する。

「仮名手本忠臣蔵」は忠臣蔵事件後四十七年目の1748年の作であるが、歴史舞台は四百年を遡る『太平記』の戦乱時代であり、事件と作品成立との時代の隔たりよりももっと古い時代に遡っている。その頃は「待ち伏せ」戦法は頻繁に用いられていた。その南北朝時代の「待ち伏せ」に江戸時代の武士浪人による流行の敵討ちと遊廓遊びが重ねられるので、敵討ちに目が奪われ「待ち伏せ」が目立たなくなる。

しかしながら、浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」をこれまでの伝説の上に伝説を重ねた視点から眺めずに、また明治以降の史的研究の冷徹な目で読まずに、それに即して虚心坦懐につぶさに探ると、従来の「待ち伏せ」の手口が品を変え所を変えて敵討ちの戦術として用いられていることに気づくのである。

忠臣蔵事件後、奇しくも四十七年目に竹田、三好、並木によって合作された浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」は、まだそれぞれの大小のきらびやかな玉を貫く糸が細りだしていても、刃傷事件の発端から討ち入りまで全編一曲に糸が通り、玉がバラバラにならずによく纏められているのである。

ここで物語の粗筋を段ごとに追いながら、まず、待つことにまつわる場面を摘出し、次にそれぞれの段や場面が特化され、粉飾され、劇化される傾向を強めるものの、従来の「待ち伏せ」の戦術が、敵味方ともに、つまり、師直方にも、由良之助方にも引き継がれていることを示し、そしてなお、「待ち伏せ」の戦術が浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」そのものの語り口の構成に「隠しの美学」として活かされていることをもその都度明示したい。

第一 鶴岡の饗応（兜改め）

当時、敵討ちは1683年の武家諸法度で禁じられ、先に挙げた作品同様、生々しい忠臣蔵事件をそのまま舞台にかけることをはばかって、四百年ほど遡る『太平記』時代の鎌倉の鶴岡八幡宮が、まず舞台となる。足利尊氏が新田義貞を滅ぼし、征夷大將軍についた頃が話材となる。

足利尊氏の弟足利直義が鶴岡八幡宮の造営で鎌倉に下向し、新田義貞の兜

を宝蔵に納めよとの兄尊氏の厳命を執事の高師直に伝えるところから、浄瑠璃は始まる。四十七の兜の中から義貞の兜を探し出すには、兜のいわれを知っている塩谷(治)判官の妻顔世が呼び出される。色好みの師直は兜のことはどうでもよく、兼ねてから顔世に横恋慕していたため、兜を難なく探し出してその場を去ろうとする顔世を「コレまあお待ち、待ちたまへ」と引き留め、兼好法師代筆の恋文を渡すが突き返される。塩谷判官と桃井若狭之助は足利直義の下向の御馳走役の大役を勤めることになっていた。足利直義の権威をかさにきた横柄な師直が、判官を生かすも殺すも顔世のころよい返事一つ次第と顔世をしつこく口説いて離さない。その悪態ぶりを見た若狭之助は顔世の窮地を救うため、機転をきかせ、すぐにその場を下がるがよいと助け船を出す。それを邪魔立てと怒った師直は若狭之助に、おれの口一つでおまえは乞食にもなる身の上だ、それでも武士かい、と罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びせる。かっとなった若狭之助は刀に手をやって師直を斬ろうとするが、運悪く足利直義のご帰還の殿中とあって果たせず、「明日のわが身の敵」として敵討ちを先送りする。

第二 諫言の寝刃(ねたば)(松伐り)

桃井の家老加古川本蔵の館に妻戸無瀬と娘小浪がいて、昨日若狭之助と師直の口争いの噂が流れているときに、大星由良之助の子息力弥が使いとしてやって来て、許嫁の小浪が顔を赤らめて応対する。明日の早朝四時に登城せよとの判官の伝言を若狭之助に伝られる。若狭之助は、明日は、師直に馬鹿にされた恥辱をそそぐため武士の意地として御前にて彼をばつさりと斬るから邪魔立てしないで欲しいと、本蔵にその意趣を打ち明ける。これを聞いた本蔵は複雑な思いで、刀で縁先の松の小枝をすぱっと切って見せる。戸無瀬と娘が止めてとすがりつくのを振り切って、本蔵は馬に乗って師直の館へ駆け出す。

第三 恋歌の意趣（館騒動）

若狭之助の家来の本蔵は若狭之助の意趣を察し、御馳走役の大役を授かったお礼として、早速、進物を持って足利の邸の師直に出向き、若狭之助の御指南のほどをと、賄賂を届ける。

若狭之助の待ち伏せ——

翌日の早朝、若狭之助は書院に通じる松の間で、師直を斬るために待ち伏せする。

「天下泰平繁昌のことぶき祝ふ直義公。御機嫌ななめならざりける。

若狭之助はかねて待つ 師直遅しと御殿の内。奥をうかがふ長袴の紐締めくくり気くばりし。おのれ師直まつ二つと 刀の鯉口息を詰め。待つとも知らぬ。

師直主従〔若狭之助を〕遠目に見つけ。「これは——若狭之助殿。さて——お早い御登城。イヤハヤ我折りました。われら閉口——。イヤ閉口ついでに貴殿にいひわけいたし。お詫申すことがある」と。両腰ぐわらりと投げ出し。「若狭之助殿。あらためて申さねばならぬひととほり。いつぞや鶴岡で。拙者が申した過言。オオお腹が立つたであらう もつともちや。がそこをお詫び。その時どうやられたことばの間ちがひでつい申した。われら一生の粗忽。武士がこれ手を下げるまっぴら——。(中略)年に免じて御免——。これさ——。武士が刀を投げ出し手を合わす。」(新潮社版『浄瑠璃集』pp. 181)

若狭之助は師直を待ち伏せして斬ろうとしたが、賄賂のために、師直の方が先手を打って若狭之助に謝ったので、若狭之助の意趣晴らしは拍子ぬけした（「金がいはする追従とは 夢にも知らぬ若狭之助。力みし腕も拍子抜け」する〔同書 p. 182〕）。ともあれ、殿中での待ち伏せによる抜刀の殺意は武士の意気地を示し、従来の私的怨恨の報復をする敵討ちの伝統を引き継いでいる。

本蔵が賄賂を贈ったことは事前に読者は知るが、登場人物の若狭之助自身は知らない。

「隠しの美学」——

ここで「待ち伏せ」の手法が物語の筋に劇的に活かされることについて触れておきたい。すでに『あきみち』で指摘したように、「仮名手本忠臣蔵」でもそうであり、浄瑠璃の語りの構成全体をつぶさに見ると劇的な場に読者の意表を衝く「待ち伏せ」の手法が採られている。

- 1) 隠された物（未知）が読者（聴者、観者）にも、登場人物にも、全く予想がつけがたく、意表を衝くもの（作品の時間的進展を巧みに使った未知の設定）
- 2) 未知が既知（先行の文意）から垣間見られるもの（読者の予想、予見）
- 3) 読者には物語の筋の展開上既知であるが、登場人物には未知であるもの（作中の語り手が、読者に物語の筋道の既知情報を与え、登場人物の行方を第三者的に眺めさせるサービス）

この賄賂の件は3)のケースとなる。

若狭之助が師直の屈辱を受け、待ち伏せして敵を討つと本蔵に打ち明けると早速、その晩に本蔵が師直の邸に馬を飛ばして、賄賂を贈る。このことは読者には既知であるが、登場人物の若狭之助には未知であり、なぜ、師直がかくまで豹変して、平身低頭して謝るのか若狭之助には分からない。しかし、読者は師直の気質を知っており、賄賂によるものと知る。

判官の刃傷事件が松の廊下で起こるのはこの直後である。読者には皆目見当もつかない意表を衝く仕掛けがある。

顔世の師直への文箱が師直が若狭之助に平身低頭して謝る以前に届いて（同書 p.179）、師直に渡す顔世の文箱の中味は、師直が開いて読んでみるまで読者にも判官にも師直にも分からない（同書 p.184）。その文箱の文には、「さなきだに〔さらぬだに——新古今和歌集〕重きが上の小夜衣、我が夫（つま）ならでつまな重ねそ」（歌意——女犯すら罪なのに、その上人妻と邪淫するなどもつてのほかである）の『新古今和歌集』に載る不邪姪戒の詠歌が入っているが、そのことは直ちには明かされない。文箱はいわば隠し箱である。隠しの美学

の1)のケースであり、作品の時間的進行の構成上わざと語り手が読者に事件の成り行きの結果を明かさずに、山場で明かし、読者の関心を未知に繋ぎとめたままにしておく。

師直は若狭之助に対する態度とは打って変わって、判官の登城が早朝の四時なのに遅いと言って、機嫌悪く、その上顔世からの先の文を見ると、顔世への横恋慕が叶わぬことを知り、感情が高ぶり判官の夫婦仲を当てこする。

「アア貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつとつかはさるる歌がこれぢや。つま[妻]ならぬつま[棲]な重ねそ。アア貞女へ。アそこもとはあやかりもの [=果報者]。登城も遅なはるはずのこと。内にばかりへばりついてござるによつて。御前のはうはおかまひないのぢや」(同書 pp. 184)と罵言の限りを浴びせる。

ここで判官はむっとするがこらえて、お酒をのんでの御機嫌ですかとやり返すと、師直は長々と出放題の悪口を言い続ける。これにとうとう堪忍袋の緒が切れて判官は師直に斬りかかるが、控えていた本蔵が抱きすくめて止め、師直は眉間の浅傷のみで死に至らずに終わる。判官は屋敷閉門を受け、即刻切腹を命ぜられた。

判官の家来勘平は判官の殿中の刃傷事件に居合わせなかったことを悔い、自刃して償おうとするが妻おかるに止められる。今度は伴内がおかるにちよつかいを出すので、勘平に踏みにじられ逃げていくとき、勘平は妻に言う——「エエ残念へ さりながら。きやつをばらさば不忠の不忠。一先づ夫婦が身を隠し 時節を。待つて願うて見ん。」(同書 p. 191) ここで勘平は、五段目に獵師として再登場するまで姿を消す。

第四 来世の忠義 (判官切腹)

『曾我物語』には武士の切腹の場面はない。対して「仮名手本忠臣蔵」では塩谷判官の刑罰による切腹と、勘平の自刃による腹切りとがあり、それぞれ意味合いを異にした場面がある。特に塩谷判官が腹を切りながら由良之助

の遅い到来を待つ場面は圧巻である。それは若狭之助が師直の罵言をじっと堪える時間と対照的である。由良之助の到来を待つて腹を短刀で切ろうとすが、待ちきれずに切り出し、さらに待つ、ようやく来たときは瀕死の状態。やっと来た由良之助に短刀を渡すまでの時間には、二つの時間が拮抗する。即ち判官の死の迫り来る時間の速さと、由良之助の到来を「待つ間」の長さである。切腹の肉体的苦痛を超えた復讐の怨念を伝える間である。復讐の趣意が伝え終わったとき死を迎える。

この切腹の場は浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」とその後になった歌舞伎台本（狂言）「仮名手本忠臣蔵」では微妙に異なる。

歌舞伎のセリフは以下である（ト書き省略）――

〱力弥御意を承り、かねて用意の腹切刀、御前にこそは直し置く。

〱心静かに肩衣とり退け、座をくつろげ、

判官 力弥々々。

力弥 ハッ。

判官 由良之助は。

力弥 いまだ参上つかまつりませぬ。

〱三方ひき寄せ九寸五分押し頂き、

判官 力弥々々。

力弥 ハッ。

判官 由良之助は。

力弥 ハッ。

いまだ参上つかまつりませぬ。

判官 存生に^{対面}せで、残念なと申せ。

御検使、お見届け下され。

〱刀逆手に取り直し、弓手（ゆんで）にがばと突き立つる、廊下の襖踏み開き、駈け込む大星由良之助、主君の有様見るよりも、はっと

ばかりにどうと伏す。

石堂 国家老大星由良之助とは其方か。

由良 ハッ。

石堂 苦しゅうない。近う〜。

由良 ハハッ。

〜あとに続いて一家中、ばら〜と駈け入ったり。

由良 大星由良之助、たゞいま到着。

判官 オ、由良之助か。

由良 ハハッ。

判官 待ち兼ねたわやい。

由良 御存生の御尊顔を拝し、身にとりまして何ほどか。

判官 オ、われも満足、さだめて様子は聞いたであろう。

由良 ハッ。

判官 聞いたか。

由良 ハハア。

判官 無念。

由良 アイヤ、この期に及び、申し上ぐる詞とでもござりませぬ。只々尋常の御最期を、願わしゅう存じまする。

判官 オ、いうにや及ぶ。

〜と諸手を掛け、きり〜と引き廻し、苦しき息をほっとつき、

由良之助。

由良 ハッ。

判官 近う〜。

由良 ハッ。

判官 この九寸五分は汝へ形見。この短刀を以て我が存念を。

由良 委細。

(東京創元新社『名作歌舞伎全集』第2巻 pp. 46)

塩谷判官は二度も力弥に由良之助の到来を見にやらせて、その待ち遠しさを表現し切腹の時間を長引かせている。対して浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」では、「いまだ参上仕りませぬ」の表現は一回のみである。つまり、歌舞伎のセリフの方がもう一回「いまだ参上仕りませぬ」を加筆して、由良之助の到来を今か今かと「待つ間」の長さでその強い復讐心を表現する。また、浄瑠璃の「この九寸五分は汝へ形見。我鬱憤を晴らさせよ」(新潮社版『浄瑠璃集』pp.197)の箇所は、歌舞伎セリフでは「この九寸五分は汝へ形見。この短刀を以て我が存念を」として、より具体的に表現している。つまり、歌舞伎のセリフの方が浄瑠璃より切腹の場を事細かく時間的に長引かせ、復讐の意趣を明確にしている。それは、判官の最期を切腹で美化する。とりもなおさず武士の復讐を美化する。それだけに歌舞伎の方がこの場面を劇的に潤色している。よって歌舞伎では見せ場となる。

顔世は亡骸を光明寺(泉岳寺に擬す)に運んで主人の葬式を済ませる。家来は城や屋敷を明け渡さずに殉死するか、足利に立ち向かうか、屋敷を明け渡すか、といろいろ評議するが、由良之助は一旦明け渡し、形見の脇差で主君の敵を討つと一味に誓い、せっかちな策には応ぜず隠密の行動をとる。

第五 恩愛の二つ玉(山崎街道)

二つ玉とは鉄砲の弾。鉄砲撃ちの浪人勘平が、鉄砲の火種を旅人に借りようと、山崎街道の夜道で久しぶりにばったりと出会ったのは、由良之助が郷右衛門に使わした千崎弥五郎である。勘平は判官の刃傷事件と切腹の場に居合わせなかったため、由良之助と対面して復讐の一味に加わる連判が押せれば武士の面目が立つと弥五郎に話す。弥五郎はそのような連判の噂はないと、とばけるものの判官の墓石建立の資金集めを装って、由良之助の復讐計画の用金を集めているとほめかす。その計画を知った勘平は、今は浪人の身で頼りないが、わが妻おかるの父与市兵衛が当てにできるので、急いで用金をこしらえるから明後日に取りに来てくれと、二人は別れる。

その山崎街道の真夜中に、山賊定九郎が縞の財布を懐にしたある親父（老人）と出会いその金を無心するが、素直に応じないので五十両を奪って斬る。親父は、娘が婿を昔の武士にするために、婿に黙って、娘と婆が承知の上で身を売って親子三人でつくった、血の涙の出る大事な金だと言いながら絶命する。山賊は無慈悲に死骸を谷底に落とす。山賊が財布を奪ったちょうどその時、勘平が猪を追って撃つ。猪と思って撃てば当たったのは山賊の定九郎であり、まだ息ある定九郎を起こせば、手にさわったものは縞模様の財布の五十両。それを猫ばばして勘平は真つ暗闇を一目散に逃げる。

ところで、郷右衛門が勘平に伝えるには、由良之助が先の勘平の用金は尊霊にそぐわないので、そのまま突き返された、と。つまり弥五郎が「懐中より金取りだし。勘平が前にさしおけば」（同書 p. 227）とあって、突拍子もない表現が目立つ。猫ばばした五十両が弥五郎に渡していたことになっている。読者は戸惑う。

ところが、勘平は弥五郎からは「非義非道」、郷右衛門からは「不忠不義」、姑からは「親殺しのいき盗人」とののしられて、腹切りをして申し開きするとき、「夜前弥五郎殿の御目にかかり。別れて帰る暗まぎれ 山越す猪（しし）に出あひ。二つ玉にて打ち留め。駆け寄つて探り見れば。猪にはあらで旅人。（中略）財布に入れたるこの金。道ならぬ事なれども 天よりわれに与ふる金と。すぐに馳せ行き 弥五郎殿にかの金をわたし。」（同書 p. 229）と後から述べられる。読者からすればいささか意外な表現である。というのは、第五段目では、弥五郎は「御用金のたよりを待つぞ。さらば」と言って勘平と別れているからだ。この意外性はわざと仕組んだものか、竹田、三好、並木の三人の合作による錯誤か。後者が有力だ。物語の筋運びからすれば、このことで読者の不意を衝くことはないからだ。不意を衝くべきは次の段の勘平の腹切りである。（「腹切り」は判官の刑罰による「切腹」と違い、武士が自らの不義不忠の行為を死をもって償う行為。勘平は自分が撃ったのは山賊の定九郎でなく、舅の親父と思い込んでいるために腹切りをする。）

山賊が殺した老人の名は明かされないが、読者は勘平が弥五郎に語る次の文意から与市兵衛ではないかと想定できる。「弥五郎殿。恥づかしや主人の御罰で今このごま。誰にかうとのたよりもなし。されどもかるが親。与市兵衛と申すは頼もしい。百姓 われへ夫婦が判官公へ。不奉公をくやみ嘆き。何とぞして元の武士に立ちかへれと。おじうばともに嘆きかなしむ。(中略) わづかの田地もわが子のため 何しに否は得もいはじ」(同書 p.207)と、親父が山賊に聞かす言葉——「私がたつた一人の娘がござる。その娘が命にも代へぬ。大事の男がござりまする。その男のために要る金。(中略) 何とぞしてもとの武士にして進ぜたいへ」と。」(同書 pp.210)とが符合するからである。前文と後文から親父が与市兵衛であると想定できる。与市兵衛が殺害されていることは、おかるも、母親も知らないが、読解力ある読者なら、五段目の文脈から予想がつく。しかし、一回目の読書で分かるかは読者の読解力によろう。というのは読者が、どれほど前文を把持しているかによるからだ。2)のケース(本文 p.324)である。

第六 財布の連判(与市兵衛住家)

与市兵衛のあばら屋には与市兵衛の妻、娘おかる(=勘平の女房)と勘平が住んでいる。朝方になっても戻らない与市兵衛と勘平を、母と娘おかるが、今か今かと待っているが一向に影も形も見えない。勘平の妻おかるは、五年切り百両で一文字屋に女郎として売られていくことを覚悟しているが、勘平はそのことを露知らない。舅の与市兵衛は百両の半分をすでに昨晩前金としてもらい、残り五十両をおかると引き替えに受け取るようになっていた。おかるが父親の帰りを朝方から今戻るか待っているとき、祇園町茶屋の一文字屋がおかるを駕籠で迎えに来る。一文字屋は与市兵衛が戻っていないのに不思議がるが、母親の「マアへ待つて」の懇願も突き退け、証文を見せ、おかるを駕籠に押し込めて連れ出す。その時、勘平が戻り、柄にもない女房おかるが駕籠に乗ってどこへ行くかとびっくりする。勘平は一文字屋から与

市兵衛にはこの縞模様の布で作った財布で五十両渡したと聞き、勘平は猫ばばした財布が縞模様と同じなのでびっくり仰天し、昨晚二つ玉で殺したのは舅であったかと狼狽する。おかるが最後の別れに父親に会いたいと言うと、勘平は今朝ちょっと会ったが戻ることはあるまいと言うので、やむなく、おかるは親の死を露知らず、「さらば」と家を後にする。

生きて帰るはずのない与市兵衛を妻とおかるが「待つ間」は、一文字屋の有無を言わさぬ急ぎの迎えと、弥五郎に渡したその五十両が実は勘平を昔の武士にするために妻おかるが身売りした金であったことが絡み合い、勘平の腹切りへと急展開する。読者は舅与市兵衛が山賊に五十両奪われ殺されて谷底へけ落とされ、勘平の舅殺害は勘平の思い違いであることを知っているが、登場人物の妻と娘おかるはそれを知らない。この場面は3)のケース(本文 p. 324) の、読者の既知を加味した成り行きに構成している。

弥五郎と郷右衛門がやって来て、勘平が猫ばばした五十両を師直の慰霊にそぐわないと勘平に返す。ここで勘平の腹切りの場面となる。

姑も勘平がわが夫を殺したのだと思い込んでいるため、勘平の非義非道を罵って言う、

「今といふ今 親の罰思ひ知つたか。皆様も聞いて下され。親仁殿が年寄つて 後生のことは思はず。婿のために娘を売り。金調べて戻らしやるを待ち伏せして。あのやうに殺して取つた金ちやもの。」(同上 p. 227)

姑は勘平がわが夫を「待ち伏せして」殺害し金を奪ったとみなす。この「待ち伏せ」は卑怯な算段の意味に使われている。姑からすれば至極当然である。また郷右衛門と弥五郎が勘平の非義非道ぶりを責めたてるから、また勘平は勘平で自分が二つ玉で殺したのは舅だと思い込んでいるから、その反人倫的行為を自刃で償うしかないと知り、腹を切る。しかし、運び込まれた与市兵衛の死骸には刀の傷跡が残っていて、二つ玉の痕がない。銃殺された者が山賊の定九郎であると分かって勘平の舅殺しの疑いが晴れても後の祭り、四十六人目の義士として一味に加えてもらおう血判を押すのが精一杯で、

ほどなく絶命する。この最期の間は先の判官の切腹の間とその意味内容を全く異にする。前者はあらぬことの先入観で自刃となる間であるが、後者は由良之助に復讐を伝える間である。盗んだ五十両が一味の資金として使われることで勘平の最期は救われる。

第七「大臣の鑄刀(一力茶屋)」から第十「発足の櫛笄(くしこうがい)(天河屋)」までは長きにわたる師直邸への討ち入りの準備である。最後の第十一「合印(あひじるし)の忍兜(討入)」が討ち入りである。分量的には第一から第六までと、第七から第十までは同じであるが、描かれている時間は浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」は史実に合わせて、一年十カ月にも及ぶ。この期間をどう見るかである。『曾我物語』では曾我兄弟の成長を待っての十七年間であるが、由良之助の一味の待機期間は短く、次の一力茶屋以降その密度を高める。

第七 大臣の鑄刀(一力茶屋)

由良之助は茶屋の遊廓で遊び惚けている。

由良之助の本音を探るためにまず、鎌倉の師直方の斧九太と伴内が様子を偵察して、とても敵を討つなどの様子は見られないとみる。次に由良之助方の矢間十太郎、千崎弥五郎、竹森喜多八の三人がやって来て、由良之助が遊女と鬼ごっこしている遊興ぶりを見て復讐は立ち消えかと失望する。

二段目で、寺岡平右衛門が、一力茶屋で遊興する由良之助を訪れた際に、おかるの兄であることが初めて読者に明かされる(同書 p.252)。物語の伏線は表に姿を見せない「待ち伏せ」の構造とよく似ている。その平右衛門は遠地で、判官の切腹を聞き、「奉公こそ足軽なれ。ご恩は変らぬお主(しゅう)の仇。師直めを一討ちと 鎌倉へ立ち越え。三が月が間非人となつて、つけねらひましたれども。敵は用心きびしく 近寄ることかなひませず」(同書 p.238)と由良之助に伝えている。つまり、独りで乞食に身をやつして待ち伏せして狙ったがだめだったので、一味に加わりたいと願う、が、由良之

助の方は泥酔を装って本心を明かさない。まもなくやってきた力弥が顔世の「仇の師直が近々本国に帰る」との密書を由良之助に渡す。そこへ九太夫が、明日は判官の命日（一年経過していることが分かる）だと言うのに、蝸の肴を食わせて由良之助の本心を探るが、わざと食う。この様子を見た伴内は、由良之助が敵を取ろうとする用心すべき人物ではないとみなす。由良之助も錆びた刀を揚げ屋に置き忘れるほどの酔態ぶりを示す。これらは由良之助が本心を明かさぬ虚々実々のカモフラージュである。力弥の密書が気になっていた九太夫はしたたか者で、駕籠に乗って帰る振りして駕籠抜けをし、縁の下で待ち伏せして由良之助の様子を窺う。

ここからが歌舞伎の名場面。

遊廓に身売りされたおかるの突然の再登場は読者の意表を衝く。1)のケース（本文 p.324）である。続く場面は圧巻である。一力茶屋の二階から鏡で映して由良之助の密書を読む。縁の下の九太夫が縁の下に垂れ下がった書状をすかし読む。由良之助は密書をおかるに読まれたと思い、たったの三日、妻の身請けをする。おかるが梯子から降りる。由良之助は復讐心を漏らさぬ隠密な行動に終始する。他方、おかるは兄から、父与市兵衛の殺害と勘平の自刃を知らされて号泣する。由良之助は縁の下の九太夫を錆刀で畳の隙間からぶすりと刺し半殺しにする。このことで初めて矢間、千崎、竹森は、由良之助の敵討ちの本心を確信した。

第八「道行旅路の嫁入」は、加古川本蔵の娘小浪（力弥の許嫁）の鎌倉から山科への道行きであり、次の「山科閑居」の前段をなすが、第二「松伐り」同様に、歌舞伎では上演されない。

第九 山科の雪転（ゆきこかし）（山科閑居）

由良之助、その妻おいし、力弥は所在を転々と変えていて、雪の降った山科の隠れ家にいる。その隠れ家を訪れたのが、本蔵の妻戸無瀬と娘小浪で、

許嫁の小浪を力弥に嫁がせるためにである。迎えてたのは由良之助の妻おいしである。戸無瀬が本蔵の来る代わりに大小の刀を夫の名代として持って参上した。おいは、浪人中の力弥と家老本蔵の娘小浪とでは身分が提灯と鐘ほどの違いで、釣り合わないと言約をご破算にしようとする。それは本蔵が刃傷事件で止めに入り、判官の本懐が遂げられなかったがためだ。力弥の嫁になろうとわざわざ鎌倉からやって来た小浪は泣きじゃくる。戸無瀬はおいしの姑去り(姑が息子の嫁を離縁させる)を怒り、小浪に別の男に嫁ぎなさいと言うが、小浪は動ぜず力弥への恋心を変えない。その上、継母の戸無瀬は本蔵に娘を粗略にしたとおもわれるのもいやなので、持ってきた銘刀で小浪を斬ろうとする。小浪は驚くが、小浪は逆に殺して下さいと言う。戸無瀬は小浪を斬った後で自決して冥土へお供しようと、刀を振りかざす、その時、跡を付けてきた虚無僧の「御無用」の声が表です。これで気後れしたのでは笑い事になると今一度振りかざすと、また「御無用」の虚無僧の声。こうまでする戸無瀬の心の内を見たおいは、祝言の盃を交わすことを認める。その引き出物に大小の銘刀を三方に載せて戸無瀬が出すと、おいは白髪の本蔵の首を引き出物に欲しいと言う。すると虚無僧は自らを本蔵と名乗り出て、「主人の仇を報はんといふ所存もなく。遊興にふけり 大酒に性根をみだし。放埒なる身もち 日本一の阿呆の鑑。蛙の子は蛙になる。親に劣らぬ力弥めが大だはけ」(同書 p.272)と由良之助父子を罵倒する。おいは怒って座敷の檜で本蔵を突こうとするが、本蔵に組み敷かれる。そこへ力弥が駆け出てその檜で本蔵を突く。本蔵は死に際に判官への罪滅ろぼしとして師直屋敷の詳細な地図を渡す。由良之助は準備万端整えていたものの、屋敷の様子が分からず、討ち入りを引き延ばしていた矢先であった。由良之助は一挙に屋敷を攻め込む方策として、たわむ竹の力で雨戸、障子をかきやぶる「夜討ち」の策を練る。本蔵は絶命し、母娘は南無阿弥陀仏と回向する。

ところで、おかるが揚げ屋の二階にいきなり涼みに出てくることは、読者の意表を衝く場面であり、虚無僧に化けた本蔵が深編笠を脱ぐのも読者だけ

でなく、母子の意表を衝く。虚無僧はいわば待ち伏せのとり偽装である。深編笠は外からは内が見えず、内から外が垣間見れるブラインドの覆面であり、顔を隠す変装の手段である。この偽装は戸無瀬や小浪を騙すだけでなく、読者をも騙すからくり人形の趣がある。無論、1)のケースである。

筆者の関心事はこうした敵味方の取る個々の偽装による待ち伏せでなく、むしろ由良之助の討ち入りまでの隠密の行動にある。遊興に雪転（ゆきこかし）で作らせた雪山を力弥にどう思うかと尋ねる問答がある。

「ヤァ力弥。遊興に事寄せ丸めたこの雪。所存あつての事ぢやが なんと心得たぞ」

「ハッ雪と申す物は。降る時にはすこしの風にも散り。軽い身でござりませうとも。あのごとく一致して丸まつた時は。峰の吹雪に岩をも砕く大石同然。重いは忠義。その重い忠義を思ひ丸めた雪も。あまり日数を延べ過しては と思し召しての」

「イヤへ。由良之助親子。原郷右衛門など四十七人連判の人数は。ナみな主（しゅう）なしの日陰者。日陰にさへ置けばとけぬ雪。せく事はないといふこと。ここは日当たり 奥の小庭へ入れておけ。」（同上 pp. 261）

力弥は雪山を一致団結の意味に解し、討ち入りが長引いていることに不満を表明するのに対して、由良之助はそれに付け加え、「日陰」に「隠れ家」の意を含ませ、四十六義士の情報を外部に漏らさずにすることが大事だとする。山科の「隠れ家」とは、討ち入り準備の「待ち伏せ」のアジトに他ならない。このアジトを山科から鎌倉に移すのが、次の討ち入り本番の課題となる。ところが歌舞伎のセリフではこの親子の問答がなく、アジトの持つ「待ち伏せ」の意味合いが薄れる。

第十 発足の櫛笄（くしこうがい）（天河屋）

アジトを山科から堺の港へ移し、そこから討ち入りの準備用具を鎌倉へ運びだすには手の込んだ隠密の行動が求められる。堺の舟主天河屋義平に依頼

する段取りで、その情報が外に漏れないことが最大の課題である。

討ち入りの武具(槍、長刀、梯子、小手、脇当て、がندوق提灯、鎖鉢巻き)を舟で鎌倉まで運ぶことを義平に依頼する。日常雑貨の輸送はともあれ、武具の輸送は怪しまれる。義平は武具の調達を外に漏らさないために、妻お園を親里の太田了竹の処に帰し、召使いに暇を出し、四歳の子供と子守を手許に置く。

十手を持った捕り手の一味が義平を取り巻き、武具馬具の輸送を頼まれ討ち入りを知っているだろうと義平を詰問するが、義平は知らぬ存ぜぬの一点張りで通す。送り届ける長持ちの蓋に義平はどっかと腰かけて中を見せまいとする。子供の喉に刀を突きつけ密事を白状しろと脅すが、義平は「人質取つての御詮議。天河屋の義平は男でござるぞ。子にほだされ 存ぜぬことを。存じたとはえ申しぬ。(中略)憎しと思はばその悴。わが見る前で殺した〜」(同書 p. 289) と言うと、その長持ちより由良之助が出てくる。驚いたのはまず、義平である。読者も不意を打たれる。1)のケースである。これは由良之助が武士ならぬ町人義平の忠信を心試した茶番劇である。由良之助のこの茶番劇の狙いは、武士ならぬ町民義平の忠信の心根を試すにとどまらず、四十六人という多勢による攻めの討ち入りでは、仲間割れしたり、密告者が出たりするので、それを防ぎとめ、一味の結束を図ることにある。ここに曾我兄弟のごとき二人だけの待ち伏せとは大きな違いがある。そのことあって、由良之助による義平の心試しが劇的に仕組まれる。その仕方は「待ち伏せ」の手法と何ら変わらない。

ここで注目したいのは、歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」ではこの場面はさまざまな脚色をほどこされ、長持ちから出てくるのは不破数右衛門であり、由良之助自身ではない。隠密な行動を維持するには、他者によるより自分自身で義平の心底を見定める方が確実であり、安心できる。「待ち伏せ」戦法が敵に対してでなく、味方に対しても用いるのは由良之助が一味の結束と偽装の度合いを高めるためである。

しかし、義平は鎌倉に行かずに堺に残る。義平の舅太田了竹によって無理矢理に離縁させられたお園はわが子恋しさに義平の処に来るが、義平は暫くの我慢であるからとお園に子を会わせない。

由良之助は大鷲文吾、矢間十太郎を後に残し、郷右衛門と力弥を先発隊に鎌倉へ立つことにした。お園の帰り際に、由良之助は文吾を回し者に使ってお園の島田鬻の櫛笄(くしこうがい)を切り取り、離縁状まで奪わせる。由良之助は鎌倉に発つときこれまでの礼として義平に包みを渡す。それを小判と見た義平は町人の自分を、金のためにした侮った非礼と見て、その包みを蹴飛ばすとそこから櫛笄と切られた髪と離縁状が出てくる。由良之助の意図はお園を尼にしておけば嫁にも行けないし、嫁に貰う人もいない、その髪が伸びる百日以内に師直に敵討ちができ、本懐を遂げた後で晴れて祝言ができる、それまでは尼として勤めてもらう、その時のための櫛笄である。一時的に尼にするのも偽装の手口である。由良之助の人情味溢れるこうした場面が討ち入り前に設定されている。

義平は町人であるため、討ち入りに参加できず、その代わりに彼の屋号の「天河屋」の名が夜討ちの合い言葉——「あま」と「かわ」——に採用され、これで義平が討ち入りに参加したも同然とされた。

こうした由良之助の町人義平に対する用意周到な算段とその妻に対する人情は、第一に密事が漏れない対策であると分かる。討ち入りの一味が世間から身を隠していることに他ならない。隠れ家が発覚しないこと、特に討ち入り直前に堺から鎌倉へ武器を移送することは一大事であり、この移送さえ成功裡に終われば万事万端準備した討ち入りは成功したも同然である。

「仮名手本忠臣蔵」より二十八年後に成った「伊賀越乗掛合羽」(1776年)は、忠臣蔵事件より七十年も前の岡山藩で起こった渡辺数馬の敵討ち事件を話材にしている。先回りして峠の辻茶屋に又五郎一行を「待ち伏せ」し、敵を討つ。これは従来への「待ち伏せ」のスタイルをとる。それは忠臣蔵事件より以前の事件を取材していることによる。

対して「仮名手本忠臣蔵」では主君の敵討ちに集団的な攻めのスタイルをとるが、かといって、決して合戦とは言えない。

討ち入りは時機の到来を、つまり、時熟のチャンスをじっと待つことが「待ち伏せ」の鉄則である。武具の準備だけでなく、四十六士の一味同心の結束を図ることが不可欠である。討ち入りまでの期間が長引けば長引くだけ結束に罅が入り、外に内情が漏れる。固い結束が討ち入りの正否を握る。神文の血判による同族的、同志の結束が求められる、ここに武士浪人の義理人情、忠義心、義侠心、忍耐心、誠実心、名誉心、克己心が、二年近きにわたる「待ち伏せ」を支える。武士道の心意気なしでは敵討ちはおぼつかないのである。

第十一 「合印(あひじるし)の忍兜(討入)」

四十六義士勢揃いして、師直が油断する酒宴の寝入り端を討ち入る。師直を探すがなかなか見つからず、やっと矢間十太郎が柴部屋に隠れているのを生け捕る。刃向かったので由良之助が手をねじり上げ、判官が切腹した形見の短刀で首を打ち落とし、亡君の位牌を出して首級を手向ける。焼香順は矢間十太郎が一番、次の焼香は由良之助が持ってきた勘平の縞の財布。敵が寄せてくる前に四十六士が判官の菩提寺の光明寺(泉岳寺に擬す)に出かけよと、若狭之助が言う間もなく、薬師寺次郎と鷺坂伴内が「おのれ大星 のがさじ」と討って出るので力弥に斬られ絶命。

このごくあっさりとした討ち入りでもって浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」は終わり、史劇『元禄忠臣蔵』のごとき泉岳寺への首級の手向け、四十六士の切腹などのことは一切話されない。主眼は討ち入りにはなく、討ち入りまでのプロセスのいくつかの劇的な見せ場である。

以上「仮名手本忠臣蔵」の粗筋はいろいろに各段や場面が粉飾されてはいるが、各場面や筋全体の運びには「待ち伏せ」の戦法が、旧来の変容として活かされていることが分かる。それは一つには忠臣蔵事件が南北朝の太平記

時代の事件に仮託されていることによる。そうであっても二つには、実録の忠臣蔵事件の成り行きを下敷きに、史実をかなり忠実に写し取っていることによる。大石内蔵助のとった戦法は、決して合戦ではなく、一味の隠密集団の「待ち伏せ」であり、それを超えるものではない。

燦然と輝くそれぞれの玉の見せ場に目が奪われるものの、まだそれぞれの玉に物語の糸が通っていて、玉がバラバラになっていないのである。そこに、四十六義士による「男時」の待ち伏せによる主君の敵討ちが見てとれる。

昭和の真山青果も大石内蔵助の口をかりて、「家来たる身は、家来たる身の本分を守って、男の道を立て貫ぬけ」「武士がその身に代えて惜しむ名というは、人に聞ゆる外聞ではござりませぬ、おのれの一分を立て貫く、男子の誠でござります」（『元禄忠臣蔵』（下） pp.209 岩波文庫）と語らせ、忠臣蔵の「男子」の果敢な姿を浮き彫りにする。世阿弥の言う「男時」の姿である。

（つづく）